

## 商店の復興に向けて

進駐軍本体が入港してしばらくすると、土産物需要が発生し、浜屋百貨店や岡政百貨店などが進駐軍向けの土産物屋として開店し、婦人服衣装、人形、漆器、美術工芸品などが大量に売れました。

しかし、年末には進駐軍の主力は佐世保に移り、兵隊相手の商売は下火になっていきました。

戦時中の建物疎開と被災で荒廃した商店街は、建物の再建から始めなければなりません。さらに、公定価格が低く抑えられたため、物資はヤミ市に流れ、商店街は閑古鳥が鳴く状態で、立ち直りには時間を要しました。



土産物店で買い物をする米兵

撮影時期 1945(昭和20)年10月

撮影 米軍

所蔵 長崎原爆資料館



米兵相手の似顔絵書き

撮影時期 1945(昭和20)年12月

撮影 米軍

所蔵 長崎原爆資料館



東浜町通り

撮影時期 1945(昭和20)年12月

撮影 エド・ロジャース

所蔵 長崎原爆資料館



岡政百貨店一帯

撮影時期 1945(昭和20)年9月～1946(昭和21)年4月

撮影 エド・ロジャース

所蔵 長崎原爆資料館